

タイトル	送別の辞
著者	追塩，千尋
引用	北海学園大学人文論集，39：1-2
発行日	2008-03-00

送 別 の 辞

人文学部長 追 塩 千 尋

2008年3月31日をもって、日本文化学科大瀨徹也・野坂幸弘、英米文化学科宝利尚一の三教授が御退任されることになりました。38号を大瀨・野坂教授の、39号を宝利教授の退職記念号とするにあたり、一言送別の辞を述べさせていただきます。

宝利教授は2000年4月、大瀨・野坂両教授とともに2001年4月に本学に着任され、それぞれ8年あるいは7年間本学の発展のためにご尽力頂きました。本学の在職年数は長いものではありませんでしたが、その御功績はまことに大きく、御退任に際し心からの感謝を捧げたいと存じます。

大瀨徹也教授は筑波大学を定年退官後、特に文学研究科日本文化専攻博士課程創設に当たっての要の教員の一人として着任されました。学部・大学院とも日本近現代史を担当され、多くの学生・院生を育てられました。教員・学生・院生を問わず投げかけられる遠慮会釈無い「叱責的」な発言に驚かされることも度々でしたが、それらはすべて本学の行く末と学生・院生を思う真剣な気持ちから発せられたもの、と受け止められました。そのことは、2003年から退任の年までの5年間研究科長の要職に就かれ、文学研究科の基礎固めにご尽力されたことに何よりもよく現れております。

野坂幸弘教授は岩手大学を定年前に退官され、大瀨教授と同じく文学研究科日本文化専攻博士課程を担う要の教員の一人として着任されました。ご専門は昭和期を中心とした日本近現代文学で、学部・大学院ともにその方面の授業を担当され、研究会に積極的に誘うなどして多くの学生・院生を育てられました。飄々・淡々と本務をこなし、緊迫した会議の場面でのその場を和ます絶妙な発言に、私たちは随分癒されました。

宝利尚一教授は読売新聞社を定年退職後、本学に着任されました。ご専

門はグローバリゼーションの中の国際報道で、学部はマスコミ論・国際関係論、大学院は英米思想文化を担当されました。ジャーナリストとしての国内外の豊富な現場経験に裏付けられた授業展開は学生を魅了し、その評価は極めて高いものでした。学科委員として、ともすれば疎遠になりがちな外国人講師とのコミュニケーションをはかるなど様々な課題に尽力されました。また、教授会での筋を通した発言が印象的で、私たちはしばしば襟を正されました。

三教授は、それぞれ豊かな個性・豊富な経験・高い見識をもって学部・大学院の教育・研究・運営にあたられました。その在任年数は長いものではありませんでしたが、密度の濃い足跡と学部の今後の道筋を残されました。私たちはその遺産を継承し、確かな歩みを踏み出すことが責務と思っています。三教授におかれましては、ご退職後もお健勝でそれぞれの分野でのご活躍を願って止みません。はなはだ簡単ではありますが、これを持ちまして送別の辞とさせていただきます。